追憶　永安幸正先生

小山　高正

巨星永安先生が往ってしまわれた。少なくとも自分にとっては天空に輝く大きな星であったことにまちがいない。ここ数年、持病が昂じて幾度か入院されていたのは存じあげていたのだが、先生が送ってくださった『なおしといやし――統合される二つの医療』を読むまでは、そんなに長く、しかも四〇代から病に苦しんでいらしたとは知らなかった。それでも時折、研究センターのロビーで新聞を読んでいらっしゃるところにお目にかかることがあった。すると矢継ぎ早に私の近況、特に研究の状況を尋ねられるのであった。『倫理道徳の白書Ｖｏｌ・２』の刊行のことはいつも気にしていらした。私は医学系の動物実験施設に長く在籍していたことから、ライフサイエンス畑の研究者とつきあうことが多かった。どちらかというと文系の研究者が多い研究センターということもあって、先生にはその方面の研究者倫理について書くことを期待されていたように思う。今思えば、もう少し先生の話を聞いて、内容を煮詰めておけばよかったと悔やんでいる。しかし、私は頭の回転が遅いというか、ゆっくり考える方なので、話のテンポが速い永安先生と長くお話しするのがどちらかというと苦手であった。おそらく、三手先を読みながら話をされておられたのではないか

と推察する。そんな私だから、今になってもっとお話を伺っておけばよかったと思うのである。

自分にとってそのような存在であった永安先生と初めてお会いしたのは、実は研究センターではなく、ロンドンであったというのも真に奇縁である。当時、私は日本学術振興会の奨励研究員という身分で、まだ学生のような生活をしていた。奨励研究員二年目の夏休みに国際学会というものに生まれて初めて出席することになった。当時研究部長でいらした大澤俊夫先生のお部屋にお寄りし、離日のご挨拶を申し上げるとすぐさま「永安君がロンドンにいるから会って話を聞くといい。」とおっしゃって、すぐに住所と連絡先を教えてくださった。その国際学会は霊長類に関する学会で、イタリアで開かれ、私はその後、スイス、西ドイツ、オランダ、そして最後にイギリスと、各国の大学や研究所に著名な研究者を訪ねる旅行を計画していたのだった。ロッテルダムから夜のフェリーに乗り、早朝のロンドンに着いたのは昭和五五（一九八〇）年七月下旬のことであった。ユーストン駅に近いビジネスホテルに荷物をおいて、早速永安先生が通われていたビカデリーサーカス近くの語学学校に出向いた。当時、先生はまだ早稲田大学の教授でいらして、モラロジー研究所の研究員を兼務されていた。「おーよく来た、よく来た」と歓迎してくださり、近くのカフェに案内してくれた。乾燥したロンドンの夏の空気に接し咽カラカラの私は、買っていただいたオレンジジュースをそそくさと流し込みながら、これから翻訳を計画している本の著者ブラートン・ジョウンズ博士に会うためにロンドン大学の子供病院を訪ねること、バーミンガム大学のマイケル・チャンス博士宅を訪問すること、ケンブリッジでロバート・ハインド博士に会うこと、またオックスフォードではリチャード・ドーキンス博士に会うことなどをお話しした。そして、学会で発表した論文のコピーをお渡しすると、すっと目を通されて「すばらしい」とおっしゃった。さらに、私が語るたびに、「それはすごい」とか「あなたは立派だ、

たいしたものだ」と褒めてくださったので、私は旅の疲れも忘れてすっかり上機嫌になり、得意満面であった。人を褒めるときは徹底的に褒める、ということの大切さをこのとき身をもって体験させていただいた。晩ご飯をご一緒する約束をし、一旦はお別れした。その晩ご飯の時に紹介されたのが、当時永安先生の下でモラロジー研究所の研究生をしていらした須賀晃一さんである。彼も今は早稲田大学の教授である。翌日、その須賀さんとバッキンガム宮殿近くのグリーンパークやセントジェイムズパークを一緒に散策したのも私のよい思い出となっている。

次に永安先生にお会いしたのは、昭和五九（一九八四）年、三年間のお茶の水女子大学での助手任期を終えて、私が嘱託研究員として研究部にお世話になってからである。私も週二日ほどしか勤務していなかったし、先生もお忙しかったので滅多にお会いする機会はなかった。それでも永安先生の恩師で関東学院大学の学院長をしていらした難波田春夫先生の研究会に出させていただくようになってからはお目にかかれる回数が増えた。また、早稲田大学社会科学研究所の客員研究員に推挙くださり、機関誌『社会科学討究』に投稿する機会を与えてくださった。さらに、システム論をしっかり勉強することが必要であるとおっしゃって、東京工業大学の公文俊平先生が主宰していらした一般システム論研究会（通称、ＧＳＲ）を紹介くださった。そうしてＧＳＲ研の月一回の会合にも顔を出すようになった。まだ学生だった出口弘さん、若き西山賢一さん、安孫子誠也さんなどの異分野の研究者との交流も経験させていただいた。永安先生のおかげで、出不精な私も人並みに人間関係を広げることができたのである。

モラロジー活動に関して永安先生が私に勧めてくださったことの一つに、大宮事務所への出講がある。先生は渋沢栄一と同郷であったので（生まれは島根ということだが）、故郷埼玉には思い入れがある。その埼

玉の中心大宮地区での「格言研究会」の講師として、私を推挙くださった。すでに、三〇代半ばではあったが、長らく大学というぬるま湯の世界に漬かっていた私にさしたる人生経験があるわけがなかった。一般モラロジアンの方とどのように接していったらよいのか戸惑いも大きかった。しかし先生は、「若いということが重要であること、父親である小山政男の開発を受けた研究者がまだたくさんおられるので、あなたの存在そのものに意味がある」ということで勇気づけてくださった。今から思い返しても、大したお話はできなかったのだけれども、そのときお世話くださった大宮事務所の方々とは今でも年賀状のやりとりを続けさせていただいており、私の宝となっている。人の肩をポンとたたいて、飛び立つきっかけを作ってあげる。それが自然とできるということは、人間を観察する鋭い目が鍛えられているということであろう。永安先生はそういう人であったといえるのである。

永安先生は自分に厳しい人であったが、人にもなかなか厳しいことをおっしゃった。私が初めて研究部ゼミでサルの母子関係について発表をさせてもらったときのことであるが、「そんな短期間の［社会］関係を見てもそれが一生の中でどう関わるのかがわからなければ意味がない」と厳しく批判された。また、研究部の奥にあった経済研究室の入り口には、「給料泥棒にはなるな」という張り紙があり、私も通るごとにどきりとしたものであった。そして日頃から「研究者たるもの常に論文を書くこと」とおっしゃっていた。私はそんな先生の姿をスーパーマンとして見ていたのであるが、すでにそのころから病に悩んでいらしたのである。最初の入院後のことであっただろうか、研究センターの事務室で新聞を読む先生と雑談になったことがあった。そのとき先生はふと自分は鬱病の気があるのだと漏らされた。私は、先生の意外なご発言に少々戸惑ったが、ノーベル賞受賞者の中に循環気質（躁と鬱が繰り返し現れる性格）の人が少なくないこと、ゲー

テが循環気質であったことは有名で、躁の時に多くの著作が生まれ、女性に恋をしたというお話をした。しかし、そのときは先生の悩みがそれほど深いとは思わなかった。何度目かの入院の後、私の自宅に先生が『なおしといやし――統合される二つの医療』を送ってくださった。そこで初めて先生の病が長く、深いことを知ったのであった。ナラティブ手法に基づく、先生の文章を読み、廣池博士の『日記』第一巻にある「容体書」を彷彿とさせられた。そして、廣池博士の日記がまさにナラティブであることを実感したのであった。ナラティブの中では、自分の弱さも悪さもすべてさらけ出さなければならない。自分史をたどることは楽しいこともあるだろうが、辛いことの方が多いのではないだろうか。しかし、それによって自己の認識が深まり、整うのである。そういう作業を、あのスーパーマン先生であった永安先生がされること自体が大いなる驚きであった。が、一方で先生の存在がずっと己に近づいたのであった。今、モラロジー概論を手にして、「ある人は、若く元気なときに思いきり仕事に精を出して成果を上げる人生を歩んできたのですが、過労となり、旺盛な食欲も災いして暴飲暴食の修羅道に迷い込み、ついに生活習慣病にかかりました。老後はいろいろな臓器の病が複合した合併症に苦しみ、入退院を繰り返し、医療費負担も少なくない生活に悩みました。人生を振り返ってみると、それはほとんど自分で招いた結果です。……自分の運命を捧げることです。……死後も人のために役立つようにと願うことです。」（四一―四二頁）の部分を読むとき、このナラティブの経験がある故に書かれた文章であることがはっきりとわかり、自然と涙がこぼれてしまうのである。あの病の中で、この概論を書かれた永安先生の心境は、まさに『論文』をお書きになった廣池千九郎そのものではなかったか。それを思うと、ますますこぼれる涙が増すのである。残念でした。先生を知るのが遅すぎました。今となっては、先生が遺してくださった課題を、一研究者として遂行することをお誓いするばかり

です。先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。